

I 豊かな感性を育む

— 子どもの豊かな気づきや感じ方を育む支援 —

副校長 吉原邦明

1 はじめに

新しい学習指導要領が実施されて今年で4年目になる。全国の各学校において、その趣旨を生かした授業づくり（授業改革）に熱心に取り組まれているところである。“子どもは、すごい。”と、目を丸くして楽しそうに語る先生が増えてきた。子どもの主体性を生かし、内面的な充実と学習活動の広がりを目ざした授業づくりに果敢にチャレンジしている先生たちの生の声である。子どもたちと一緒に学習を進め、子どもたちのめあて追求の力を引き出し、子どもたちの学習の仕方を受け入れ、子どもたちの活動を支える役割に十分なエネルギーを注ぎ、子どもたちと共に高まり合う体験をもった先生たちの実感から出た言葉である。

「子どもって、すごいですよ。教師の私が考えていなかったことまで、ぐんぐん自分からやってくるので、本当に驚いています。」

このように、教師として考えていた学習活動の幅が狭かったことを強く感じている先生が少なくないのである。

以前は、どちらかと言えば、子どもは教えなくては何もできないという一種の不信感に似た見下げたような考え方をもっていて、自分の計画した学習内容や手順の枠の中に子どもを閉じ込めて引き回していたと言う。よい教師であるためには、教師が用意した学習の内容や手順の範囲内で、どれだけ多くていねいに教え込むかに持てる力を注ぎ、粘り強く食い下がって指導をして成果をあげるように努力してきたとも話す。

このような授業は数少ないことではなかった。授業の多くが、主として知識や技能を子どもたちに画一的に授ける教師主導の注入型の授業であったことに対する反省は起こっている。このような授業を熱心に行ってきた結果とばかりは言い切れないものの、現在の子どもの実態に目を向けてみると、次のような諸問題が大きな教育課題となってきていることはよく知られているところである。

即ち、自分の考えをしっかりとっていない子ども、指示されたことは辛うじてできるが自分からは何もやろうとしない子ども、生活や学習に対して意欲を示さない子どもなどが多く見られるようになってきていること、さらには、不登校に陥る小・中学生や途中退学する高校生、非行・いじめなどにはしる子どもが実に多いことなどである。

今、教育改革のうねりの中で、知識や技能を教師主導で一方的に教え込む画一的な学習指導のあり方が問い直されている。中でも、教育の根底をなしている「子ども観」の転換を中核とする「教育観」の見直しが中心的な課題となっているところであるが、“子どもは、すごい。”と子どものよさに感動をしている教師は、新しい子ども観に目覚めて、子どもの主体性や能力を見直しているとともに、子どもの豊かな感性に触れて胸を揺り動かされているのである。

2 子ども観の転換と子どもの内面性・感性への着目

(1) 子ども観の転換

波多野誼余夫氏は、ハルの行動主義的な学習理論と、その立場から解釈されたフロイトの精神分析理論を「伝統的な理論」としながら、「人間はもともと非活動的であって、ただ不快な緊張状態が生じたときのみ、それを取り除こうとして行動を起こすのであり、人間は、叱咤激励し、精

神的、肉体的、社会的な賞罰を与えないと学習しない。」とするその理論を排除し、人間は、本来活動的で、自分の能力を発揮するためにすすんで働きたがり、好奇心にかられて知的探索を行うという形で勉強するものだと主張している。¹⁾

また、西野範夫氏は、『子供たちは、表現や活動を統制するものが自分たちの側にあるときには、さまざまな対象や環境、できごとなどにかかわり、既存の考え方、自分にできることやできそうなこと（感じる、考える、判断すること、手がけること、思考力などを働かせてかかわって納得し理解したことやその過程のイメージなど）を働かせて、考えたことなどを試み、またそれにかかわることを繰り返しながら、その結果などに「なるほど」と納得していく主体的な姿をみることができる。…中略…子供たち一人一人は、本来、さまざまな、そして、それぞれのよさや可能性をもち、それを発揮したいと願っているとともに、それを実現する有能さをもった存在である。』という子ども観を示している。²⁾

このように、これからは、子どもは、本来様々なよさや可能性を内に秘め、よりよく生きたい、より向上したいという人間の本能とも言える望ましい欲求をもった存在であるにとらえる子ども観に立つことが大切であるということである。子ども一人一人の思いや願いを尊重することによって内発的な学習意欲を引き出し、そのよさや可能性を自ら生かすことができる学習活動を保障することによって、子どもは学習の喜びや成就感を味わい、それがまた子どもの主体的な学習を進めるエネルギーとなることを信じる「子どもの自己実現を支援する教育」を推進していくことを重視することが大切であるということになる。

本校では、子どもが、自己実現をめざして学習の前面に出てくれば出てくるほど、また、一人一人の子どもの内面性に目を向ければ向けるほど、子どもの感性への働きかけが重要さを増してくることに注目している。

(2) 子どもの内面性・感性への着目

これまでの教育は、先に述べたように、ややもすると、知識・技能等の外面的な内容の伝授に重点が置かれることが多く、個性的な内面世界を耕し育てることが軽視される傾向にあったとの指摘を無視することはできない。これからの教育は、従来のように外面的に評価しやすい知識や技能などの教育内容の指導のみを偏重するのではなく、新しい子ども観に立って、目にはとらえにくいけれども、子ども自身が主体的に自己実現をめぐす内面性の充実（豊かな感性の育み）に着目した教育を推進することが大切である。

梶田叡一氏は、教育の内面性への着目の大切さについて、

- 「活動しているときに、一人一人の子どもたちの内面で、どういう思いが、どういう考えが、あるいはどういう感情が渦巻いているのだろうか、ということにこだわってみなくてはいけないのです。」
 - 「子ども一人一人の独自の内面世界を尊重しつつ、しかもその内面世界そのものが豊かになり、深まっていき、秩序だったものになっていくような教育的働きかけがきっとあるはずですよ。逆に言えば、そうした働きかけこそが、真に「教育的」と形容できるものだろうと思います。」
 - 「(子どもの) 実感・納得・本音に配慮していくと同時に、その実感・納得・本音（内面世界）を変えていく教育が考えられなくてはならないのです。」
- と述べている。³⁾

子どもの内面性への着目ということは、取りも直さず、子どもの感性への着目ということに外ならない。要するに、現在、学校教育に求められているものは、子どもの自己実現を支援するために、新しい子ども観に立ち、子どもの主体性を生かし、子どもの考え方や学習のし方を尊重しながら、子どもの内面性の充実を図る教育を推進することであるととらえ、本校では、その教育の実現に向かう道筋として、「子どもの感性への着目」から、アプローチしているところである。

3 感性のとらえ方と学習のステップ

(1) 感性のとらえ方

感性のとらえ方は多様である。感性とは、外部からの刺激をキャッチするアンテナであるとする考え方もあるし、アンテナから取り入れた情報によって音声や画像をつくり出す受信機であるとする考え方もある。また、音声や画像を送り出すことを通じて、それに触れるものへ影響を及ぼそうとする機能まで含めた受信機の働きまでを含むとする考え方もある。

本校においては、受信機の機能にとどまらず人間的な営みまでを加えて感性をとらえている。感性は、外界からの刺激に対する敏感さをもとに、価値あるものに気づいたり感じ取ったりして、知性と相互に働き合いながら、思考・判断・想像・表現などに作用し、より価値あるものを求める活動を促すものである。また、感性には、知的、倫理的、宗教的、芸術的、及び、それらの根本につながる表現美的などの多様性があるとともに、感性は、本来、内面的な活動であるが、表現活動を介して高められるものであると考えているところである。まとめて言うと

感性は、外界からの刺激に対する敏感さをもとに、価値あるものに気づく感覚であり、価値あるものを求める働きを促すものである。

と定義づけている。⁴⁾ ただし、刺激にたいする敏感さについては、刺激の出所を外界からのみ考えているのではなく、自己の内面から発する思いや感じに対しても敏感に気づく感覚をも含めて考えている。

(2) 学習のステップ

感性を「価値あるものに気づく感覚であり、価値あるものを求める働きを促すもの」としてとらえると、子どもの学習は、次のようなステップを経て行われるものと考えることができる。

気づく・感じる（驚き・感動・実感・疑問・課題など）⇨考える・想像する⇨表現する・実現する・実践する⇨振り返る（⇨気づく・感じる⇨考える・想像する⇨表現する・実現する・実践する⇨振り返る）

例えば、川向こうの自動車工場を見ながら通学している子どもたちが、工場の大きさや多くの人の動きや忙しく動き回るトラック、積み込みを待つ数え切れないほどの完成車などに着目して驚き、感動し、あの工場の中はどうなっているのだろう、どのようにして自動車が作られるのだろうと疑問を抱く。そういった社会科の学習課題として価値あるものに気づき、感じ、工場内部の様子や働く人々の姿を想像し、授業の中で工場見学の計画や視点をもつ。（考える・想像する）さらに、見学を行い、情報をつかみ、まとめ、発表し合ってより確かな、幅広い内容で自動車産業の実態や生産に携わる人々の工夫などにふれる。（表現する・実現する・実践する）そして、これまでの学習を振り返り、社会科の学習としての価値あるものに気づき感じていく。そこでまた新たな課題にさらに気づき、自ら進んで調べてみようとし始めるのである。

このように、子どもの学習は、価値あるものに気づき、価値あるものを求める働きを促すものとしての感性に支えられて、前述したようなステップを経て行われるものと考えることができる。

本年度の研究は、昨年度に引き続き、本校の目指す「子どもの豊かな感性を育む」教育のあり方を求めていく過程における、学習ステップの第1段階「気づく・感じる」に焦点づけて、いかにすれば、子どもの豊かな気づきや感じ方を育むことができるかを明らかにしていくことに取り組んでいるところである。

4 子どもの豊かな気づきや感じ方を育む支援

(1) 子どもの気づきや感じとりの起こり

「心ここにあらずば、見るとも見えず、聞くとも聞こえず。」と言う。子どもにとっても、子ども自身が注意を向け興味や関心を示さないものは見えず、聞こえないばかりではなく、気づきや感じとりが起こりようがない。当たり前のことであるが、子どもの注意を向かわせ、興味や関心を引き出すことが、気づきや感じとりを引き起こすための必要条件である。

注意を向けることと興味や関心を示すことでは、興味や関心をもってかかわる方が、より深い気づきや感じとりを生むものであり、興味や関心が内発的な学習意欲に高まっていった場合には、より強烈な気づきや感じとりが起こるものである。

ここで、子どもの気づきや感じとりの起こりを詳しく理解するために、興味や関心の発生について、子どもの欲求（要求）との関係で考察してみたい。

<興味や関心の発生>

- ① 興味や関心は、子どもの能力の発達と関係している。子どもの内部に起こった発達欲求を満足させることができる身体的・精神的能力を身につけ始めるとさかんにその能力を使用しようとし、その対象に興味や関心を示すようになる。例えば、三半器官の発達しているときは、高いところから飛び降りることに興味を示し、何度でも繰り返すなどである。
- ② 興味や関心は、遊びや学習の欲求を満たす環境の条件によって、促進されたり制約されたりする。例えば、遊びに使う草木や道具や場所、遊ぶ相手や遊ぶ時間などの環境条件に影響される。
- ③ 興味や関心は、子どもの学習・生活の目標や価値観の変化と密接に関係して発生する。目標は、年齢が低いほど近い将来や身近のことに関係し、年齢が進むとより遠い将来やより広い領域に関係するようになる。子どもの興味や関心の対象は、その達成欲求や実現欲求の変化に応じて選ばれる。
- ④ 興味や関心は、時に模倣の欲求によって発生する。子どもは、権威あるものとして親や教師を見て、その行動や考え方をモデルとして模倣する。模倣によって生ずる満足または快感がその繰り返しを促進する。そのようにして親や教師が興味や関心の対象として受容される。このことは、テレビやマンガの主人公などの場合についても起こることである。①～④⁵⁾

(2) 豊かな気づきや感じ方

子どもの気づきや感じ方が豊かになるということは、態度との関連にも注目する必要がある。例えば、学習においては、学習に対する真剣さ、持久性、集中性、組織的態度、研究心、創意工夫、協力性などがどの教科でも共通する望ましい学習態度があり、そういった態度による学習から起こる気づきや感じとり、さらには、そういった態度での学習の結果として新たにとらえた気づきや感じとりなどは豊かな気づきや感じとりの方向に向いていると言えよう。それはまた、各教科や道徳・特別活動の教科等の特性としてある各教科独自の学習によって身につけていく態度についても、同じように豊かな気づきや感じ方を育むものであると考えられる。

また、子どもの気づきや感じとりの豊かさを、興味や関心の発生と子どもの欲求（要求）との関係で、マスローの欲求5段階説から考えてみると、第1段階の「生理的要求」から発する興味や関心に基づく子どもの気づきや感じとりは低位に置かれる。マスローは、第2段階の「安全の要求」、第3段階の「所属と愛情の要求」、第4段階の「自尊の要求」と上位に位置づけ、第5段階の「自己実現の要求」を最高の要求とすることから、自己実現の要求から発する興味や関心に基づく子どもの気づきや感じとりは最も豊かな気づきや感じ方であるとするところではなかろうか。

(3) 子どもの豊かな気づきや感じ方を育む支援

本来、子どもたちは、自分を取り巻く物事や事象に進んでかかわり、自分の経験や現在もっている能力をもとに、課題やめあてを見つけ、それを主体的に解決したり実現したりすることのできる可能性をもっている存在である。その新しい子ども観に立ち、一人一人の子どもたちが、自力で自己実現を図っていく過程において、ゆき悩んだり、つまずきそうになったり、また、より価値あるものを求めようとして方向を見失いそうになったり、意欲を失いかけていたりしたときなどに、教師が、子どもの内面性にしっかり着目して、言葉かけをしたり資料の提供をしたりなどして、学習活動を進める子どもたちを励まし、支えることによって、子どもたち自らが、自分なりの精一杯の気づきや感じ方を身につけていくのである。それが子どもの豊かな気づきや感じ方を育む支援である。それは即ち、子どもたちが、主体的、創造的に学習活動や生活を展開する資質や能力とともに豊かな感性を身に付けていく道程であると考えている。

具体的には、①～④の興味や関心の発生条件をベースにした次のような教師の取り組みが、子どもの豊かな気づきや感じ方を育む支援となるのではないかと考えている。

- ① 子どもの発達欲求を発達課題として取り上げ、学習内容や学習方法などとして授業づくりに取り入れていく。言い換えるならば、子どもの独自の内面世界（実感・納得・本音）を尊重し、子どもの思いや願いを授業の中で組織化する授業づくりをすることが大切であるということである。そうすることによって新しい子ども観に立った、子どもの自己実現を支援する教育を進めることができると考えている。
- ② 子どもの主体的な学習や生活が活発にできる豊かな環境づくりをする。人的環境としての教師自身のあり方が問われるとともに、豊かな遊具や自然材・教材・教具・施設などの物的環境の充実に努力することが必要である。また、自然体験・社会体験・芸術体験など具体的な直接体験活動を取り入れたカリキュラムの作成や温かい人間関係に包まれた思いやりに満ちた学級づくり、さらには、活動の時間の保障なども豊かな環境として整えることが大切である。
- ③ 子どもが、学習・生活の目標を明確につかみ、その実現のために自主的に取り組む課題解決の学習を行う授業づくりや学校生活づくりをする。さらに、子どもたちが、発達段階に応じた好ましい価値観をもって学習・生活に精一杯取り組むような態度を育成する。さらに、「学習の仕方の学習」を重要視して、子ども自らが自己実現に向かって自力で取り組むことができるようにする。
- ④ 「教師こそ最大の教育環境である」ということの重みを自覚し、新しい子ども観に立ち、子ども一人一人の感性や尊厳を大切に、子どもの内面性の充実（豊かな感性を育み）を図ることに重点をおいた支援を積み重ね、子どもの手本となりながら、子どもとともに価値あるものに気づき、さらに価値あるものを求めて高まり合う。

<主な参考・引用文献>

- 1) 波多野誼余夫・稲垣佳世子『知的好奇心』中公新書 1973年
- 2) 文部省『初等教育資料』No631 1995年4月号 P 4
- 3) 梶田叡一『内面性の人間教育』金子書房 1989年
- 4) 研究紀要『豊かな感性を育む』広島大学附属東雲小学校 1994年
(片岡徳雄『子どもの感性を育む』日本放送出版協会 1993年参考)
- 5) 広岡亮蔵責任編集『授業研究大事典』明治図書 P 106を参考に筆者改筆